



笠松の偉人

◆◆ シリーズ② ◆◆

15歳で父に代わって講義をした天才学者

角田 錦江

中央公民館の南庭の端に、高さ約4mの高さの石碑(墓碣銘)が立っています。その石碑には錦江の行績が記されています。

錦江は1803年(享和3年)に笠松に生まれました。性格は、素直で飾らなく、子どもの頃から親孝行であることを皆に知られていました。15歳の時に父に代わって儒学の講義をしましたが、教え方は厳しく、まるで大人のようにでした。19歳の時父が亡くなり、続いて母も亡くなり、錦江はやせるほど悲しみました。

錦江には兄がいましたが、貧しく子どもも多いので、暮らしは大変でした。そこで錦江は力の限り兄



を助けました。その行いは隣の村々まで伝わりました。美濃郡代の野田斧吉はこの善行を幕府に報告しました。すると幕府からおほめにあずかり、特別に銀30両がいただきました。

錦江の名声は、良い行いや儒学などで広く伝わりました。犬山城主や尾張藩の殿様などから、ぜひ文学を教える役職について欲しいという依頼がありましたが、すべて断ってしまいました。錦江は、笠松に本拠を置き、子弟の教育をすることが自分の務めだと考え、「喬木塾」を開き、生涯地元を離れませんでした。「田舎で他によい先生がいないから、先生として讃えてもらっている。私はことわざに言う『鳥のいない里のコウモリ』なのだ」と謙遜していました。

1884年(明治17年)に82歳で亡くなり、錦江の墓は盛泉寺(西町)にあります。

詳しくは、町ホームページ(「モラルセンス一覧」で検索<No.9>)をご覧ください。

かきまつの民話「誓願寺の門前市」③

「誓願寺様に店が出た。ありがたいこっちゃ。こなええかざではだまって帰れん。一本ちようだいすか。」

しょうゆのこげるええかざにさそわれて、一本、二本と買っていくお客が、あとを絶たなかった。

こうしてはじまった焼きだんごの店は、とふでんがくも売るようになった。

毎月、お春とおとはは、一宮からお灸をすえてもらいに来っていた。このふたりは、着物やきれを風呂敷につつんで行商し、近くで市がたつと店を出していた。

この頃では、年をとりの大風呂敷のつつみを背負うのがえろうなった。そこでふたりは誓願寺の灸をすえてもらいに来るようになった。

「あのようおとらさ。きょうも、だんご屋はようはやってござったぜ。」

「ほんとにようはやるな。ありや、もうかるぜ。」

「わたいらも、荷物もってきて、並べてみよか。店番しながら、かわり番にお灸すえてもらやええし。」

(つづく)

